

2016. 11. 22 (火)

響き合う異質性

鈴木 慎一郎

おはようございます。この場所に立つのは久しぶりです。少し前に別の仕事で、人間福祉学部のチャペルで壇上から話をする機会がありましたけれども、そのときはそんなに緊張せずに割とうまく話せたのですが、この場所に立つと、なぜかいつもすごく緊張します。特別な雰囲気があるのかもしれませんが。

今日は久しぶりのチャペルメッセージを準備しようと、今朝6時前に起きてパソコンを開いたら、すぐに地震と津波のニュースが飛び込んできました。ちょうど3.11の午後2時46分以降の数時間のように、ほとんどテレビに張り付いたまま過ごしていたあの時間が思いだされて、今もどこかで心臓がバクバクしている感覚でいます。これからどのようなことが起きるのかわかりませんが、大きな被害がないことを祈るばかりです。

今回は一文字シリーズということで、「響」というお題をいただいています。結論から言ってしまうと、私たち一人一人の中にはさまざまな異質なものが常に響き合っているということ、それもこれから響き合うのではなくて、既に響き合っている状態だということをお話したいと思います。

常に、既に、ハイブリッドであるということ

お題が「響」である以上は知らないふりではできませんので先に申しますと、私がこれまで関わった本の中には、タイトルに「響」という言葉が入っている本が2冊あります。打樋先生にご紹介いただいたとおり、私は音楽を社会学的に研究しています。もともとは、南北アメリカ大陸に挟まれたカリブ海に浮かぶ島々の音楽を中心に研究をしてきました。最初に何人かの人たちと一緒に作ったのが、『カリブ 響きあう多様性』という、1997年ぐらいに出た本です。そしてその数年後に自分1人で書いた本を出しました。『レゲエ・トレイン ディアスポラの響き』という、やはりタイトルに「響」が入っている本です。

カリブ海といえば響き(サウンド)、という連想がつまりはあったということなのですが、カリブ海地域はいろいろなリズムや音楽を生み出した場所として世界的に知られていることもあり、編集者との相談を通じて、そうしたタイトルに決まったというわけです。『レゲエ・トレイン ディアスポラの響き』の副題にある「ディアスポラ」とは、ある土地を離れて別の土地へと移ってき

た人々のことです。カリブ海地域には先住民も住んでいましたし、場所によっても違いますが今でも先住民人口が暮らしています。ヨーロッパ人の到来後には、ヨーロッパ人がアフリカ人を奴隷として連れてきたりもしました。さらにはアジアや中東からも、さまざまな人種や民族がカリブ海地域の島々へと移り住んできました。こうした混成化の中から、カリブ海の豊かな音楽やリズムは生まれてきました。住民に関しても、いろいろな人種や民族の人々が暮らしてきていますし、音楽だけでなく文化全般、たとえば料理も、いろいろなものが混ざっていたりします。

とは言え私はこの話を、いろいろな別々の場所にルーツを持つ人々がカリブ海地域という社会で仲良く暮らしているという珍しい成功例として紹介したいわけではありません。そもそもの社会というものが、いろいろな異なったものの寄せ集め——悪いニュアンスに聞こえるかもしれませんが不純、もう少し学術的な言葉を使うと「異種混交性 (hybridity)」や「異質性 (heterogeneity)」ですが——種々雑多な人たちの集まりでしかありえないのではという、そんな話をしたいのです。

逆に、社会が純粋でなければいけないという、例えば最近アメリカ合衆国の一部で高まっている白人至上主義のような考え方のほうが、不自然ではないかということ言いたいです。カリブ海地域の社会はいろいろな人たちが集まって出来上がっていますけれども、ひょっとしたら、本来は世界中の社会がそのようなものではないかと思っています。

少し飛躍するかもしれませんが、このことは、社会という括りについてだけでなく、人についてもあてはまるでしょう。

人間一人一人は、自分らしさ、私らしさ、純粋な自分らしさといった、一貫性や整合性を持っていないといけな、ぶれてはいけない、という考え方が、世の中にはあるようです。ですが私は、一人の人という存在自体が、いろいろな異質なものによって成り立っていると考えたほうが、むしろ当たっているのではないかと思ったりするわけです。たまたま目に見えている姿では、一人一人の体を覆っている皮膚によって外部の環境から区切られているので、「私」と「あなた」とは違う、という前提で私たちそれぞれは生きています。一面ではそうですけども、私たち一人一人を作り上げてきているものは元々は皮膚の外側からやってきたものなわけで、実際に私たち一人一人は外から摂取する空気や食べ物がないと生きていけません。要するに、私たち一人一人は自分で思っている以上に実は不純な存在であり、不純であることをネガティブに考えるべきではなくて、異質なものが私たちの中でそれぞれ響き合っているのを素直に認めて、そのこと自体を祝福したほうがいいのではないかと思うのです。

いろいろあって今ここへと至る

それに関連して、最近、私は研究演習の学生のグループ発表で面白い発表を聞きました。それはある文献を皆で読んだ後で、グループごとに企画してもらった発表の一つでした。文献が提示していた論点の一つは、「イギリスの高校で労働者階級の子もたちが、中産階級とは異なる独自の文化を作り上げてそれに誇りを抱いているけれど、それは他方で、誇りを持つことで結局は階級社会を再生産してしまうというネガティブな面も持

つ」、というものでした。

発表の構想を練るための時間の中で、私はあるグループに、こんなふうに勤めてみました。「きみたち一人一人は、たまたま今は関西学院大学社会学部の私のゼミという同じ所にいるけれど、一人一人がそこに至るまでに、どのような経路を通して、またどのような異質なものと接触してきたのかということを取り返って、いったん発表の形で出してしまったらどうか」と。すると面白い内容の発表をしてくれました。

例えば、ある学生がしてくれた話はこうでした。高校でいわゆる偏差値がそんなに高くない教育を受けてきて、小学校時代の友人はぐれて学校に来なくなってしまったり、高校で同期だった女の子たちの間では高校卒業直後ぐらいにベビーブームがあったりの環境にいた一方で、その学生自身は、高校2年だか3年の時に付き合っていた相手に大学受験を勧められ、一所懸命受験勉強をして関学に入ったのだと、別の学生はこんな話もしてくれました。自分は現在、関学の大学生でいるけれども、中学時代、高校時代、それから、浪人もしていたので浪人時代の間に、いろいろな種類の友だちと一緒に時間を過ごしたのだと、父親が肉体労働をしている家庭の子ども、逆に、父親がホワイトカラーでそれなりに高収入を得ている家庭の子ども、そうした両方の種類の友人がいたことが、自分にとってはプラスになっているとその学生は捉えていました。また別の学生は、地元で被差別部落出身の子どもとも友だちとして一緒に過ごしてきたという経験が今も生きていたという話をしてくれました。

今もここでこうして皆さんと私とは時間と空間を共有していますけれども、皆さんそれ

ぞれがいろいろなルーツを持ちいろいろな経路をたどってここに来ていますので、一人一人が語り始めれば、またいろいろな話を聞くことができるかと思います。一人一人がいろいろな所から影響を受けて、その一人一人がたまたま今この空間を共有しているという、その事実だけでも、祝福したいぐらいすごいことだと思います。

分断に橋を架ける

世界にはわれわれが生まれた時点で、既にいろいろな分断や亀裂ができてしまっていました。階級によるもの、ナショナリズムによるもの、他にもいろいろあります。日本における学歴の違いというものも、そうした分断や亀裂の一つかもしれません。

小さい頃に、あるいは、中学時代や高校時代に、自分とは違う種類の人たちと接触してきた経験。ひょっとしたら未来に、われわれはその経験を生かして、分断や亀裂に橋を架け、社会をいい方向に変えていけるかもしれません。多様性や異質性の経験が、そのようにプラスに働くかもしれません。

最後に、チャペルメッセージのフレーズを紹介すると、私はアメリカの黒人の音楽が好きで聴いてきましたけれども、ある曲の歌詞に“don't burn your bridges behind you”という箇所があります。直訳すると、「自分の後ろの橋を燃やすな」ですけれども、意識すると、自分がこれまで渡ってきた橋を燃やしてしまったらいけない、ということです。つまり、自分が今、そこに至るまでに通ってきたルーツ(routes)を決して忘れてはいけないという意味です。皆さんも今現在関西学院大学で楽しい学生生活を送っている

ことと思いますが、これまでの自分に影響を与えてくれたいろいろな種類の人たちのことを決して忘れずにいてほしいと私は思いま

す。以上です。ありがとうございました。

(社会学部教授)